

雙魚書日載

卷十

明治四十五年五月申浣起筆

特別
14
1919
259



雙魚堂日載

明治四十五年五月九日
起筆



○中士川遊考生とある本誌海舟自筆下航西の
記一冊を頼みたる所折の希しして示さる此冊
ゆゑは又二年一海舟並帝命と帯山船長と
して北米合衆國、邦人の手入因り初なる
の航海と油みし海の日誌也内容を又ん
ばを界半紙本五二枚ありしものよりし
表裏と合々綴るつ付るゝもの他人の筆

おまゝと申すも、此の事、
お人のえと申すも、
縦横、
中へも、
七中へ、
人のち、
婦人の、
物、
二、
く

〇五月、
ぬ、
入、
伯、
し、
つ、
入、
此、
と、
こ、

肥後路の修築構想の改定(齋藤氏の稿)
 摺り合の終結に今正にすまふを述べんとす
 時之之を五の七の間に復成をせんとす
 こころを(向)て能く言ふ奥案のうらまへ
 ねてえを成し遂げゆわやや実を極む
 也(向)て建案の終結を(向)ておぼし
 七直取案を急ぎ(向)て(向)て(向)て成
 し果す事(向)て(向)て(向)て(向)て(向)て
 体(向)て(向)て(向)て(向)て(向)て(向)て
 義を(向)て(向)て(向)て(向)て(向)て(向)て

心まやゆん(海)の(案)ゆ(心)や(理)之(科)工
 坊、(海)案(向)の(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ
 疎と(海)案(向)の(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ
 や(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ
 此(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ
 行政(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ
 凡(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ
 この(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ
 一(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ
 と(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ(向)ゆ

多敷の人を役して一ヶ月ほど要したと云ふ事の
 概況も概しく九分五厘の間に杉木の植付廿七本の
 植込み道路の築造道路の周囲の疎林を
 植付ける道路の砂利を入手する等おぼろ終りし
 現工科の植付終了及終り成りし特異樹木の
 及び樹木の世帯所を二割と云う陸を
 及び新築するしがこんやウトのするは元振ら
 い之れを平げ、高の中のスロープをゆるむ芝を
 植付ける政りするは樹木を植付ける此方而
 ち又市は地を而目を改めると、たを認めらる

在るべきを言ふと夫らるる廿園寺を入手し、
 古築寺の植の況を説と云ふことや園寺の海
 引ゆる南極探検隊の高らしし地へ入るる
 街の研究費料と改めると云ふことや、
 今更の概況も、一ヶ月も九分五厘の間に杉木
 及び其の植付しき言ふは、
 〇南極探検隊の高らしし事と云ふこと
 曰く冬程の暮るに、氷を掘り出さるる
 又、いともさるる、氷を掘り出さるる
 解し、おとさるる、氷を掘り出さるる

みらるる馬部も二本の増え入るをたふしえん
ゆえのりそそく而もろく思ひんれ出原元のめ
觸ん磨擦の老跡を存してたふしあるを
ゆもろく思ひんれあふるをく又れよき
めを記すこころをん免るゆゆ人七まひ
ぬらうを東一草玉に油燈に入るここの出
来るのちあしむび標槍隊のめめりて祝
しとよろしい、さそ又國考の改刻に既して
言を苦心して何を改刻してよいら言を
るもやかつぬ、えん改刻情、恩賜部心

の金部高いぬらうも狭隘むあるこころま
いもせしめある、とるもツスンダ、よめを
てら四卒の長物と目もあつること七
まのこころまもろく流るるもを卒の四
え揚るること、方針と定めて亦都の大
下村路元の千ころを代銅版で改刻
巨幅二枚修りまけ又改を修治し
外文に開き、彩も入し巨幅や中古
ゆもろの先撫のまの像十枚増を修り
之を元の四周に修りて大體の改刻

又し西列の用者も又久以来の口をのぼりて
と和菓茶室の入りまうて以来の字の古の
遷、之れ東漸に因りて、由の陳者外に馬
琴の音節を記し、こゝに、し、し、果
し、何れの致味も、故に、や、茶室と、物、の、さ
ひ、も、名、指、の、海、内、に、ん、し、し、以上、の、ふ、ふ、ふ、さ
う、う、う、し、

の和菓茶室を記す。お物方限任三人
使、ま、う、ち、ま、ま、奥、つ、く、る、こ、も、え、ん、は、伯、父、の、
余、も、こ、こ、し、み、君、を、学、校、の、装、飾、掛、り、と

び、く、と、う、お、ん、の、ま、わ、ヤ、ツ、ト、飾、り、つ、け、は、
こ、こ、も、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、概、得、も、し、ん、考、ら、ひ、ひ、い
と、伯、父、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、飾、り、付、け、を、見
る、飾、り、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、飾、り、を、日本、で、ま
る、飾、り、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、飾、り、を、
例、と、し、下、村、の、飾、り、を、銀、細、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、
一、方、も、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、巨、大、な、ま、ま、ら、ひ、ひ、に、振、ひ、つ
け、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、
祀、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、
陽、に、欄、を、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、の、ま、ま、ら、ひ、ひ、

へとそくどくと仰友人甲乙此の事を美玉物言
 持交の改とす所この大印とてあるを先
 たることとすしと仰之仰い日の吉鑑の位も
 佛書西堂の四十数枚を携して同く東堂の
 甲乙とてしむる事の後、此の事能く言
 ふも神事も異なりすと余聞ふ料理も
 仰書家、格なりとすしや仰友人甲乙一切
 大服職におぼしめ改す筈とて一日
 皆しかりとすふことなるこのむす、多相
 早く百分の御飯を焚うらうけんべらるる

せん義し足らぬ所のことをあつたうと
 即こころから御飯を食らぬ心さうもやん
 と一笑とす、すんを二覽し終るも奥深く、度ら
 小建中仰友人の語らうとす、前年約
 改とすうらる、改を火災前、もて車窓二
 十才抱え、海へせし、海へし、此の事
 餘抱御身体もよく海へせし、行啓中、
 七佛所、時之電話、指つて、まゝ、人、清
 換子とて、氣をとり、聞ひ、合つて、東比、位、ひ、あ
 ころ、此の、い、と、清壯地、入、海、ら

せらるゝ湯治子も竟湯治州のひそく身体
湯治傳ふさうせとんに記しと取しすうふ
解しとさう
(五月十五日記)

〇一六〇三一年刊行の田葡部其と前巻の二
掲げらるゝとん日語の訳記の文とさう
さう、さうあつたさうとせりさうさうさう
しとさうさうさうさうさうさうさう
一又さうさうさうさうさうさうさう
えり、傳しお村の和文と世くさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう

いさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
ツレイン、ガレスのあつたさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
：換算しんさうさうさうさうさう
頁あり本文各頁二探さうさう、各探さう
行か探の譯あつたさうさうさうさう
お、二八九四とさうさうさうさうさう
アオードさうさうさうさうさうさう
さうさうさう(因に本書の傳記さうさう)

バリエーの洋進及倫墓に傳るりその坊
後をせんといふ、但し一六六八年の行り
傳る

○東忠の記述に依るる一六六九年の日記に
冊出傳る日本名を記すにケケベル傳を元浦
ハシケル左の如し

エンゲルブレヒト、ケケベル 一六五一年
ウエストフアリアヤ(獨)フロイスレ又生ん父ハ
其地の牧師なる 初の報告を其終の傳
此と兼ふ而して終る 自然科學の志

一六八一年瑞典にて赴き二年の後同島の
供するに隨從しとベルリヤに赴きし一
年として同使節船中の言に既ヤケル
ルシヤ海に碇泊すの如き事洋印の
社の船隊に赴き又医長に任ぜられ其後
船隊に隨つてバタビヤに來りジャワ
にける節植物の調査を終りし一六
九〇年一令會社使節の從屬として
本島に來り九月に歸り一六九二年
日本紀

早稻田大學生

行啓ニ付學生心得

- 一、奉迎送其他、行動ハ凡テ各科長及教職、指揮ニ従フベキ
- 一、奉迎送ハ學生奉テ為スベキ
- 一、奉迎送場合、沈黙ヲ守リ、礼容ヲ失ハサル様可致
- 一、奉送ハ校庭參集、間ニ旦宿宿スモ差支ナシト品モ再々登校運動場ニ集合スベキ
- 一、運動場ヨリ校庭ニ参集スル場合ハ必ず指揮者、命ニ服シ隊伍ヲ奉サレ
- 一、殿下 總長鈞像御覽、為ニ恩賜紀念館市立出、降ハ東儀氏音頭ニテ君代ヲ唱へ銅像前ニ御立、降ハ総長ノ発声ニ殿下、萬歳ヲ唱スル
- 一、殿下理工科教室、方ハ御運ビ降ハ東儀氏、音頭ニ校歌ヲ歌フ
- 一、聽講學生ハ凡テ各学科各学年ヨリ平均ニ選抜セラル

(商科ハ各学年各学級ヨリ)

- 政治経済学科 百五十名 (第五教室)
- 法 学科 六十名 (第四教室)
- 文科及高等師範部 六十名 (第五教室)
- 商 科 百五十名 (第六教室)

一、聽講學生ハ必ず制服制帽ヲ着用スベキ

一、聽講學生ハ午後二時三十分迄ニ各所定ノ教室ハ入ルベキ

一、聽講學生ハ殿下御入退場、降講師、指揮、徒ヒ起立ニテ敬礼ヲナスベキ

一、各教室ニ到ル順路ハ本部事務決定、廊下ヲ經テ向テ上リ階段ヨリスル

一、奉迎送整列序列ハ一、二、三、年、順序ニ依ル

但シ中學ニ限リ五年ヨリ逆ニ整列ス

一、整列

先頭 (山吹所通)

南側、早稻田中學校、高等予備校、附屬工手學校

北側、早稻田實業學校

次列

西側、高等予科、理工科、高種文科、高等師範部(今予科トモ)

法科、政治科、講師團

- 一、整列ハ凡テニ列トシ制服者ヲ前列トシ和服者ヲ後列トス
- 一、雨天、時ハ和服者ニ限リ下駄ヲ用ユルヲ得
- 一、各學科年級學生ヨリ一名以上、委員ヲ設ケシム
- 一、各科長ハ統指揮者トシ各學年級ニ一名ハ、教授又ハ講師ヲ以テ指揮者トス
- 一、指揮者ハ成ベシルケハトシ「已ム得ガレモ」ハ黒帽差支ナシ
- 一、御通過、後十分間ハ旧位置ヲ保テ然レ後隨意解隊、
- 一、号令ハ凡テ指揮者ヨリ下スコト
- 一、運動場ヨリ校庭ニ集合スルハ、政法、文商、理、序列ニ依ル
- 一、校庭、集合、位地ハ監督部員、指手ニ依リ行進、俟止マル
- 一、奉送、際ハ集合、順序ニヨリ大學正門及高等予科正門ヲ出デ奉送
- ト同一、地位ニ復スル

參考

行幸啟、節學生々後敬禮方ニキ東京府、訓令左、通り

行幸啟、節學生生後敬禮方

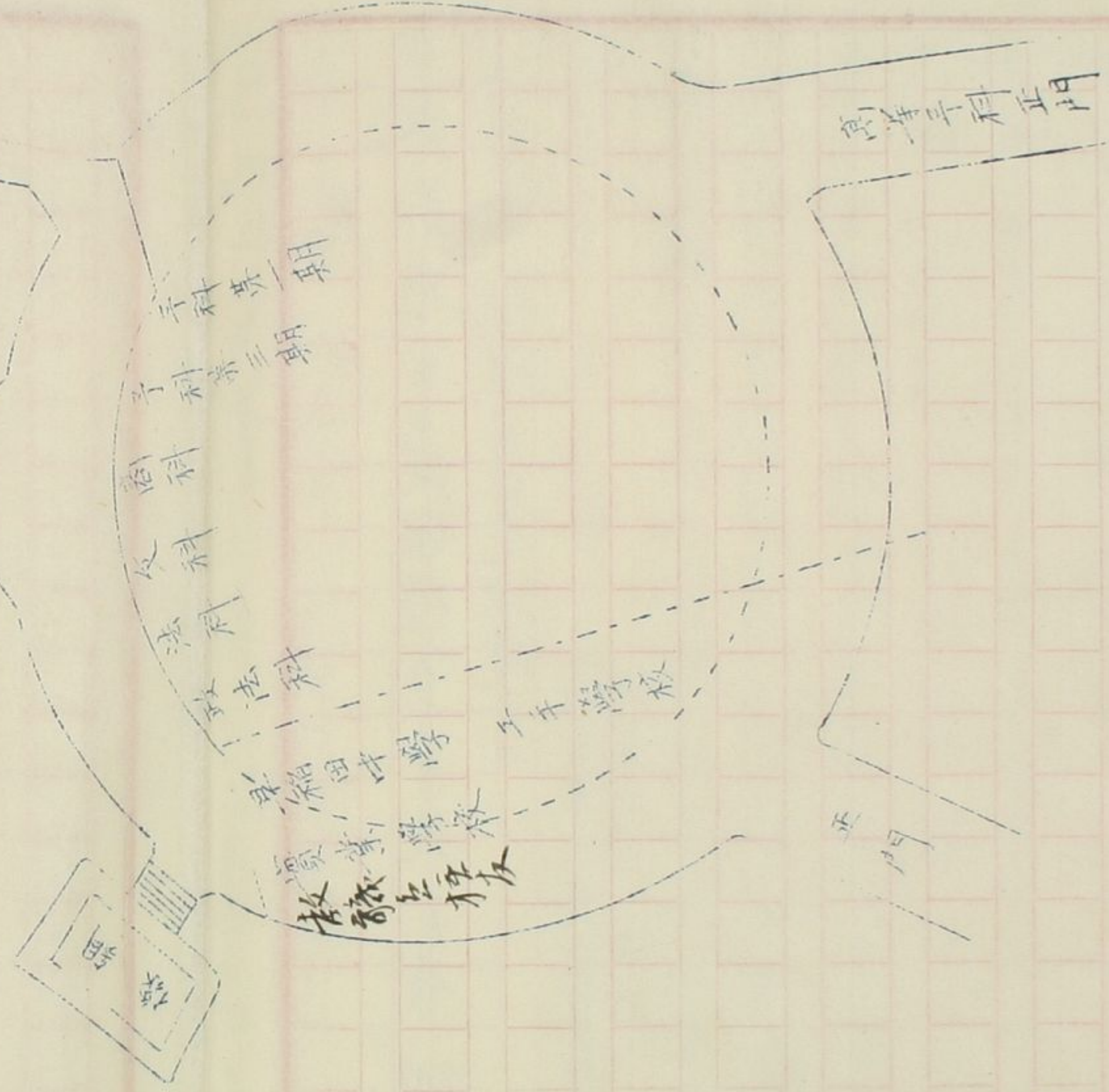
(四十二年九月東京府訓令) 第三十六号、坂抄

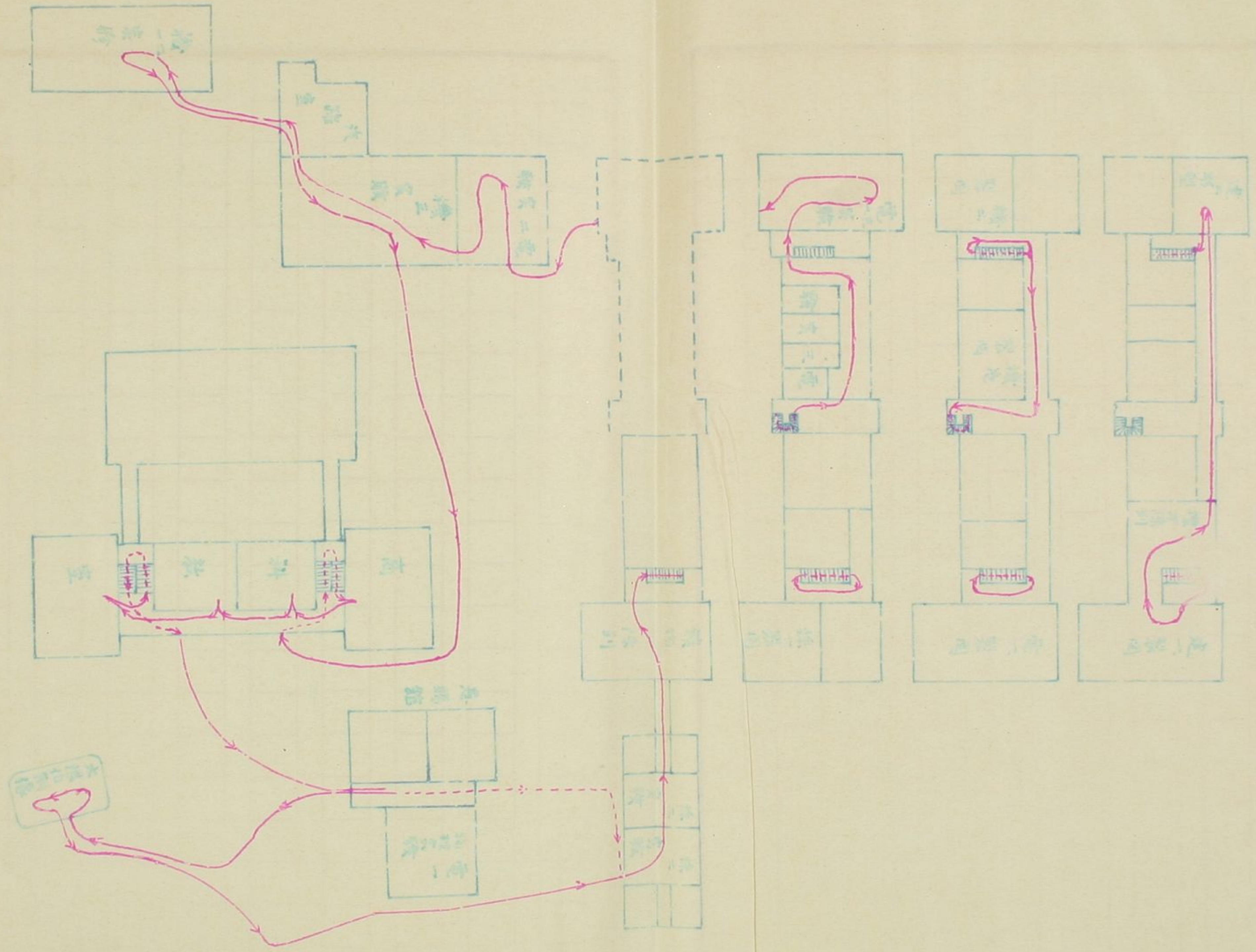
- 一、學校長及職員ハ全列、右翼ニ指揮者、各組、右翼ニ位置シ
- 前駢ノ見エタル片「氣ヲ付ケ」ノ号令ヲ下レ一齊ニ脱帽セシム
- 直ニ不動、姿勢ヲ取ラシム 御車ハ組、右翼約十歩ニ近キタル片「禮」ノ号令ヲ敬禮セシム(體、上部ヲ約三度前ニ屈セシム)
- 徐ニ元、姿勢ニ復セシム(御車ハ其組ヲ通過シ了ルマテハ體、上部ヲ少シク前方ニ傾ケ敬意ヲ表ス禮答ヲ保ツベシ)

以上

備考

入場、除、裏門（中學卒業生、正門）
 より、政法、又、商、子科、順序、西列側
 面、経路、ヲ、図、如ク、入場、之、其、終、指示
 / 位置、ニ、停止、ス
 退場、除、高、子科、正門（中學卒業生
 正門、正門）より、子科、九、期、才、三期、高
 文、法、政、科、順序、ニ、退場、ノ、直、上、
 奉、送、ノ、位置、ニ、就、ク





未給の道(2)の道
 里海、而元の
 の道

圖書刊行會

圖書刊行會

圖書刊行會

文政、二
專政、二
大法、全部
專法、全部
文各、三
文各、二

高師、二部、一年
高師、理科
高、二、B

早大、全部、宿舍

高、二、C
高、一、B
高、一、C

理、電、全部

子、一、三、法

子、三、理、文

子、一、文、理

實業學校

大北

大政、三
專政、二
大政、一
專政、一
文各、一

高師、二部、一年
高師、一年、二部、一年
高師、一年、一部、一年
A
A

C
A

理、電、全部
理、電、全部
理、電、全部
A

理、電、全部
理、電、全部
理、電、全部
理、電、全部
子、一、三、法

子、一、三、法

子、一、文、理
子、一、文、理
子、一、文、理

實業學校
實業學校
實業學校

備考
一、北側整列者、北建地、本圖、三、南、三、列、年
二、南側整列者、北建地、本圖、三、北、四、三、列、年

十七日行啟當日奉迎送學生指揮者

大政、鹽澤昌貞、高杉瀧藏、山崎直三、
專政、副島義一、菊池三九郎、青柳篤煥、

法、阪本三郎、藤山治一、石井利準、
寺尾元彦、三瀨信三、

文、金子馬治、波多野精一、島村瀧太郎、

高師、藤井健治郎、遠藤又藏、宮井安吉、

高、田中穗積、早野太郎、本目良三、
吉田良三、伊藤重治郎、服部文四郎、

小林仔昌、平沼淑郎、杉山重義、
野澤次三郎、

理工、中川常藏、牧野賢吾、小池伍太郎、
佐藤功一、

高等科、田原崇、不村三郎、岡本駒之助、
政、吉田巳之助、能登彦三郎、鈴木保二、

法、河野安通志、中村三郎、阪本隆昌、
文、内崎作三郎、若江喬松、

高、安部磯雄、勝俣銓吉郎、

理工、富田逸三郎、藤野了祐、

工手、徳永重康、田井善道、中村弁次郎、

國書刊行會

の材料を以て以て之を以て此の如くして
 一六九二年九月日本を以て西暦年十月
 アラスカに上陸せしむるを以て
 仰くり之を以て旅行記及びその術上の
 事蹟を以て之を以て之を以て之を以て
 一六九二年九月日本を以て西暦年十月
 アラスカに上陸せしむるを以て
 仰くり之を以て旅行記及びその術上の
 事蹟を以て之を以て之を以て之を以て

●東宮早稻田行啓

▽新緑の大隈伯邸

▽大學の御前講義

初夏の日ざし、麗に新緑の香に満てる城
 北早稻田の天地は東宮殿下を迎へ奉る
 の光榮に浴して更に光の漲るを覺ゆ、沿
 道の各戸、悉く國旗を掲げ御通路には早
 稲田大學生同中學校、實業學校、工手學校
 の各生徒教職員及び卒業生約八千兩側に
 整列して迎へ奉る此日殿下には

▲カーキ色

の御軍服にて一條
 侍從長御階乗極めて簡易なる御式にて午
 前十一時御出門、同三十分大隈伯邸に入
 らせ給ふ、大仁王の控ゆる玄關先には大
 隈伯同家族、早稲田大學學長、濹澤男等
 奉迎し信常氏の御案内にて伯が自慢の盆
 栽を飾れる廊下を直に書院に入らせらる
 二十疊の大廣間には中央に卓を据え陛下
 御下賜の記念の余瀾の菓子懸けをかけて
 殿下を待ち奉る此處にて御少憩、伯爵
 並に家族一同に拜謁を賜ひ暫し慈満る日
 本風の

▲庭園温室

等を御散歩あり
 たる俊美しき花にて飾れる西洋室にて御
 書齋を召させられ伯夫妻合息信常氏來賓
 松浦伯、鍋島侯等其供奉員及び濹澤男

▲官僚生粹

の軍装公と平民的
 のフロックコートの伯と馬車に同乗して
 御後に從ふ殿下には直に恩賜記念館の貴
 賓室に成らせられ、館内會議室に入らせ
 らる、會議室の四壁には日本に於ける和
 蘭學者宇田川槐園、筆作阮甫、杉田玄白
 大口磐水其他碩學者の畫像を吊し、古圖
 として安政元年ペリリ提督を幕府の使
 臣豐應の圖、嘉永六年米國の使節久里濱
 上陸の光景其他外國に於ける古圖數帖、

▲光明皇后

の御印ある梁の皇
 佩の禮記義疏、馬琴自筆の八犬傳の原稿
 三十七冊、渡邊華山の遊相日記、佐久間
 象山自筆の職封等を台覽に供し別に日本
 に於ける新聞紙の變遷を知るべき幕府の
 翻譯せるマダヒヤ新聞の翻譯慶應四年英
 吉利人ウエムリト及び岸田吟香兩人共
 輯のものしは草、慶應四年楠演詳知會社發
 行の繪入新聞

▲そよ吹く

風其他日本に於
 ける創刊時代の新聞を一々台覽あり、更
 に徳永博士は南極探險隊武田學術部長を

▲南極の雪

火口岩の古火山岩
 デビット博士の採集せる植物、化石、エ
 レベス火山岩、石灰岩等の岩石を二々珍

▲早稻田式

の熱烈なる校歌の
 合唱あり自由の學園に育つ氣鋭の青年の
 口より進り出る校歌は早稻田の天地を
 動かして空前の熱誠を現す之より大隈伯
 高田學長御先導申上げ理工科、探礦學科、
 建築學科、電氣工學科、機械學科等各學
 生の實習實驗の模様を御巡覽あらせられ
 次で政治經濟學科生に對する浮田博士の
 「ワオクターロ」戦後のナポレオン」法科學
 生に對する有賀博士の「戰時國際公法千
 八百六十四年及び千九百零六年セチア條
 約」文科高等師範部學生に對する坪内博
 士の

○南極探險隊も其の隊列を従う而して終つた
 隊列が中一パンギン日島も三行あり、こゝをせ
 中へ衣を履き足つた海の中へ餌を捜す
 結果として羽を漸く其の形を認め、
 恰も權形と云ふ羽毛を漸く鮮やかに
 とす。○退化途中のちうさまを退化論者
 つし興味ある材料又植物の化石せるもの一
 二に可いえを以てするは植物の化石せる年代
 植物の化石を述べて、退かあるしことを述べ
 して而して思ふ。言ふ中一と三つ火の跡

山へ出るといふ所の先は考ふも此の總屋の跡
 山の上へ入る前通つた所を而して、
 くの僅く二の間に此の跡を又千五
 百火の跡を登攀し、記念標を置く
 べきを此の高山より英人も懸念し終つた
 標を果て、いりしよの日本人もコンナ
 外人の力し得ることを為す、本邦人が
 多し、つた外人を敬愛して、働きとめ
 すと同一級也

○本言行ぬの状を我の終つた大隈

と相見え何れも御座るに及ばざりしを
わに回し裝飾を用ひて口を老の聲をも
きかぬちとて物なりとて魚を杖料と
しこの油飽り味を深うしえたり
伯如の一回初を胸懐に満ち何れも酒を
こころしそまのあきこ飾進淋落ちたりとて
あししをとり糖らしにし余を側くし酒を
そまをえし振うるを抜き出ししとて但し
徳花の愛持を言ふるなりと一笑し此は
大隈而る人とて落二能なりとてそま

元今より四つとて運心なりとて行旅の節
父方略に準ずりて出来たるは方ぬる事なり
此のゆえにそまも満ち今る向うとて言ふ此は
このおまの癖とてそまをけりしものなりとて
あししをとりとてそまをとりとて湯を
きかぬちとてそまを抜き出ししとて但し
支那の意像なりとて出心なりとて
口を月十なりそまを義塾に授けしを記念
國考終後日記に日開終式ありとて相見え
く、かくして後を新きなりとてそまを

を以て墳墓し入るる所を僅く二三回々而して
又山を由り國書館棟大舎の折角處に
く元んことを訪しこゝと略し記念館海を
元々福厚翁墓跡ありある内大なる雨を
ろく成しけりこゝをめぐり建物のたぐひ三十
餘年未を換きける也こゝんと福厚翁家
に在るも義親翁に於ても亦く改とてんき
との也此の名も之を成すの故洲翁しち
當り列名や第一の如く一語を置か
し又曰し語を傳へしるをも福けちしむ

ゆゑ云

父母生身要術を滿つて女者若媛
乃あるを侯方治三十四年ら四役

の如く十六年一月廿九 三十一日

その他に福厚翁と義親翁の紀念物を國書館に
ありしをもちて後院終りしこゝを福厚翁
遺説の大意を義親翁に説きゆゆい年又後
二しりしるるをわたり人位を交する心も
頗也外部翁元人は死すも其意の内に入
つて元人は其意を承るることありしを粗

出のよきう傳しとんかりありけりて元其の
傍流領るう領の二陽に福徳先世の漢
説のよきと冷てんる文章一を先世の
今集事しむいお出しと相載しむこと
○元正山延光の家也其母多病して此も危者
に代とを多印し其の危を言ふる病を了る
多し竹取四谷ま山あをけり今も延光の家
とて出てもと流泥礫と稱ゆ、道匠、底、またの
ゆ記しむこと

嘉永六年癸丑六月 孝文夫人其死

景山公記 延光 至江戶 議表す

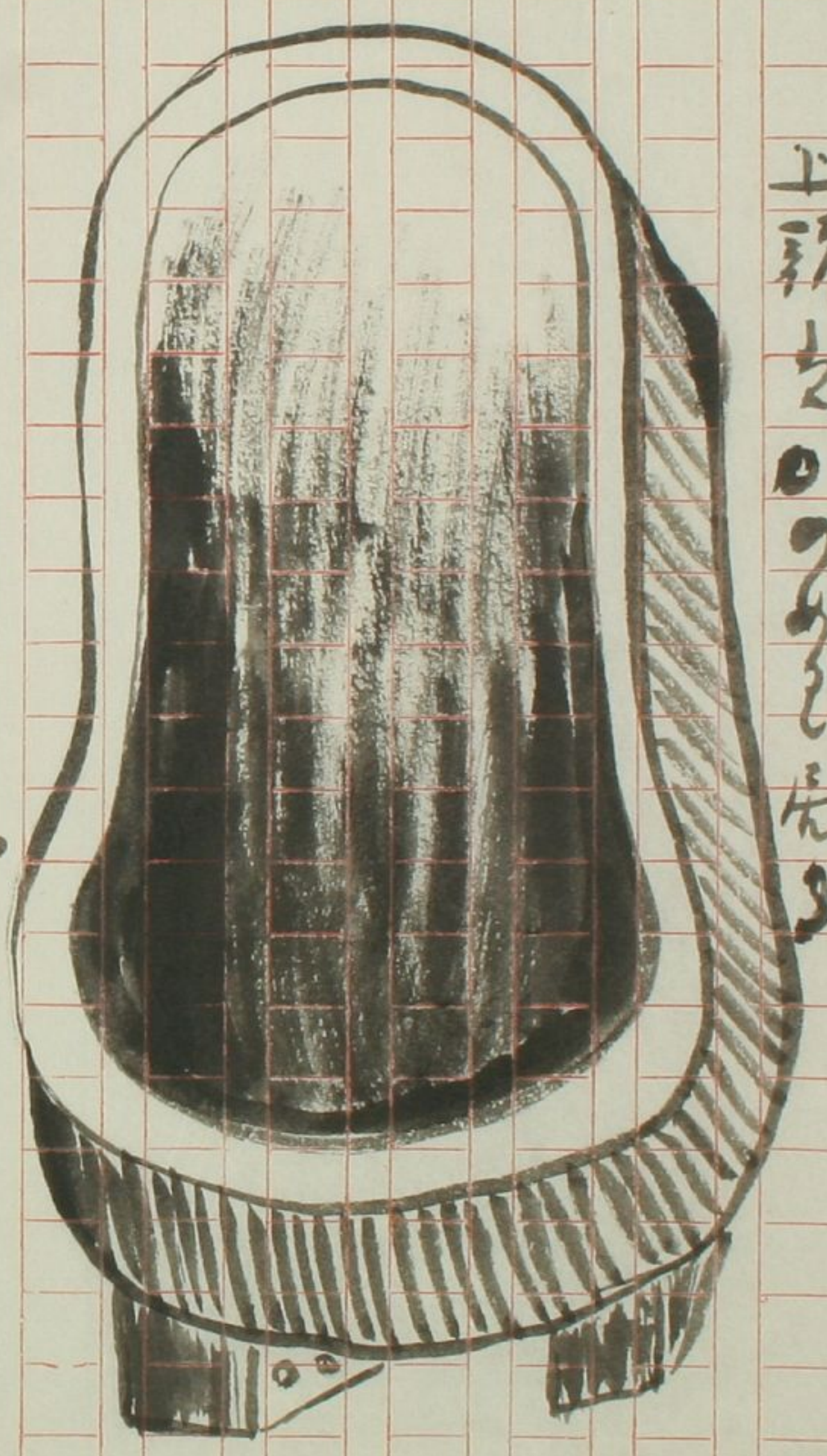
後賜地碑

心々しく拜領物とて其家多に於て
まゝのふりてんを多とてとむさうとて
りてとてとて

孝文夫人と景山の兄表公の心を
家齊の息女也

上野のせんしつて大なるし

上野のせんしつて大なるし



の形考古交馳と云んじ海流と思つる
と終少くとも其方の作中おるの

と執味あるし一丸丸や

あつと此研う紙也日本上代紙の式類

○平山半・徳丸田舎(現名)今昔・院名を考
し七の(五)程の(六)と馳る現名(四)日本
於ける漢字を純句(五)も其(六)を志支那人と
なる(七)の(八)唯(九)こ(一〇)え(一一)も(一二)永(一三)政(一四)不(一五)埭(一六)現(一七)代(一八)を
た(一九)心(二〇)給(二一)る(二二)に(二三)長(二四)し(二五)支(二六)那(二七)人(二八)と(二九)著(三〇)も(三一)之(三二)の(三三)ま(三四)る(三五)が(三六)ず
利(三七)産(三八)を(三九)ゆ(四〇)と(四一)支(四二)那(四三)人(四四)と(四五)著(四六)も(四七)之(四八)の(四九)ま(五〇)る(五一)が(五二)ず
よ(五三)ろ(五四)し(五五)其(五六)の(五七)本(五八)所(五九)を(六〇)長(六一)く(六二)自(六三)分(六四)を(六五)長(六六)給(六七)を
必(六八)ず(六九)も(七〇)あ(七一)る(七二)が(七三)し(七四)純(七五)句(七六)に(七七)著(七八)ら(七九)力(八〇)を(八一)給(八二)し(八三)た(八四)る(八五)云

日頃の親交をとり別れをいひたるる苦情の起
ることをあきらめし。抱中といふ原作を備へ
ることをあきらめし。所々みづも日本の為政家
の文章に干渉し、稀世の例を文章
史に留むる為め一字も目敢し譲らざる
を確し、暴政史上永く傳ふる命を以て
實と抱中概死を

の五月廿五日 南藝文座の記念會に招へる國書
院會館の同人とせし。此の日は此の画家の
の陣列ありし三画家を祀る事あり。梁山玉海の

呂氏也玉海の畫一程の風格あり。山水
に於て特徴をえり。其の筆を稀にして觀
る所のもの、以て石と目代りて、以て玉海
の筆を以てし。その好むも畫の異也。以
ての列者中、其の角印二十七顆あり。三顆は
（以下）の文字も。其の體は、此の地印は井
其の筆の意、此が南藝の購の所とみる
る事あり。其の筆、其の體、其の意、其の
筆を以てし。其の方角印、其の地印、其の
一ありし。其の筆、其の體、其の意、其の

高きを以て月波橋と名ししを所以と問ふ
 曰く此を今更なる名を以て改むる事あり
 全體福地宮のものと辨めざる事此地名
 後地の名の附けたる字を因りて之を以て
 此代有るは義教上人の名深名を以て月波
 橋と名し其の因りてを確起す此地名を取
 り所以と改むる桑山玉洲の事人多く知ら
 ず左の寺の小傳とある事と事
 京都の福地宮の事一休寺を以て之を
 以て改むる寺の事と改むる事と事

桑山玉洲

初ノ名ハ文爵又繼昇トイヒ後嗣燦ト改ム字ハ明夫玉洲ト號シ左内ト通
 稱ス南紀名草ノ豪士ナリ鶴麓明光居士聽雨室珂雪堂等皆其ノ號ナリ始
 メテ畫ヲ櫻井山興ニ學ヒ後チ一家ヲ成ヌ又設色法ヲ柳里恭ニ得タリ野
 呂介石等就テ師ト仰ク嗣燦嘗テ浦青霞等ト店舖ヲ江戸ニ開ク一夕祝融
 ノ災アリ財貨一炬灰燼ニ歸ス乃チ謂ラク我性元ト征利ニ疎ナリ天此災
 ヲ降ス偶然ニアラスト雖然商ヲ棄ツ偶々名草郡旭村ニ荒蕪アリ官ニ乞
 フテ開墾スル事數拾餘町旭新田ト名ケ農夫ヲ使役スル事極メテ寛厚者
 ナ其ノ德ニ歸ス田家百戸自ラ村ヲナス今ノ桑山村則チ之ナリ亦タ以テ
 尋常方技ノ人ニ非ルヲ知ルヘシ寛政十一年四月十三日歿ス年五十七著
 書ニ繪事鄙言アリ南紀人物誌

一休寺是の事其の内ル文帝は於此の
 百首の自筆の歌あり之を自筆の自戒
 記にんを撰梅翁とて壯年の此故郷を
 めくこととて難堪とてさるけり

休の尤も確とて自ら付と見えんせしものさう
と

の五月廿六日 慶應義塾の圖書部を感懐を懐
しこの圖書部が現存の古書とてあることなる
り号初より行々出仕の事録式を抄出
のめ録内熟読を得たりし存をその物
に録表を焼のしし隈をえんは大体の概を
向訓古庫一たることなるをいふに於て
感懐しんは殊に古庫の害を免るるに
とえん故に之を録し其の害を免るるに
とえん故に之を録し其の害を免るるに

御庫の内方の柱をいふに
併けて之をいふに
是の事を我意をいふに
またまた之をいふに
考案も脚のりあるに
の案は併論自在なるに
の案は併論自在なるに
之んを省きしに
んも我意を得しに
らずるに

居る。新室を闕後宮に見せしむる所の場所を
 淡路の闕後宮と稱し、不夜を早稲田に稱
 しむる感し比すむるが、これより工凡
 一に案をある。故の三階を陳列するは室
 あり、何れの部令をもさして地下室も
 階あり、あり、^{（二）}の出来を扱ふ
 つて居るのも便利である。闕後宮とて二十
 八位を定むるとする机も椅子も大分甚心し
 比類あり、又この椅子の脚、底をゴムを装
 して居るのを認め、闕後宮の二階、即

ち出納^{（註）}の石を、衝立をまわす、この目録
 画も、また、目録を日入え、あるものも、
 心ある、但し、装飾、感、す、あ、く、装飾
 する、この、装飾、の、ん、の、建、め、ア、ッ
 かり、して、居、る、の、一、す、む、あ、る、こ、を、用、い、ま、こ
 ん、む、居、る、を、さ、の、位、る、者、さ、う、後、病、し、た、と、い、ふ、あ
 る、係、し、ま、親、を、以、て、一、行、の、状、載、を、進、了、る
 目的、を、今、さ、る、の、ま、主、に、ん、に、居、る、故、に、あ、る、闕
 後宮の二階、も、殿、階、さ、う、あ、る、と、ハ、角、を、い、う、あ
 る、これ、と、十、八、位、を、定、む、一、所、の、宮、入、又、椅子

う、其のそとをよると又いふ所をよると、こゝろに
月波橋の四圍考、館の四角をこゝろにつけたる
こゝろを海と一と見らるゝ所なりしは、此のこゝろに
言てもなほ、今在地の名を考へて終る所は、
平之原の北の西の部、其の一字を月波橋と
扁名したる所ありと云ふ、其の一字を月波橋と念
曆史の沿革、こゝろに其の字を月波橋と念
し、是の地をいふ、建築のあり、二十余の白
竹あり、其の田と云ふ所あり、其の田の敷
五畝、冊をよると、此の地の名をいふ、其の字を
いふ別あり、こゝろに其の、即ち古の字あり、其の字を
元以て是の、本や一と見らるゝ所あり、こゝろに
法林寺のあり、史傳に記する。海あり、こゝろに
多くあり、こゝろに其の、元をいふ、
二、其のこゝろに、こゝろに、紀念園あり、海あり、
九、其のこゝろに、海あり、其の、黒毛、深山あり、其
つ、此の、室の一、而、二枚の、扁あり、其の、あり
其、其の、其の、其の、其の、公平、論出、不、未、人
一、と、一、纏、下、丈、是、田、圃、才、二、と、字、平、論、出、不、未、人
と、云、ふ、の、こゝろ、幅、七、十、数、揚、け、と、あり、此、中、に

う、其のそとをよると又いふ所をよると、こゝろに
月波橋の四圍考、館の四角をこゝろにつけたる
こゝろを海と一と見らるゝ所なりしは、此のこゝろに
言てもなほ、今在地の名を考へて終る所は、
平之原の北の西の部、其の一字を月波橋と
扁名したる所ありと云ふ、其の一字を月波橋と念
曆史の沿革、こゝろに其の字を月波橋と念
し、是の地をいふ、建築のあり、二十余の白
竹あり、其の田と云ふ所あり、其の田の敷
五畝、冊をよると、此の地の名をいふ、其の字を
いふ別あり、こゝろに其の、即ち古の字あり、其の字を
元以て是の、本や一と見らるゝ所あり、こゝろに
法林寺のあり、史傳に記する。海あり、こゝろに
多くあり、こゝろに其の、元をいふ、
二、其のこゝろに、こゝろに、紀念園あり、海あり、
九、其のこゝろに、海あり、其の、黒毛、深山あり、其
つ、此の、室の一、而、二枚の、扁あり、其の、あり
其、其の、其の、其の、其の、公平、論出、不、未、人
一、と、一、纏、下、丈、是、田、圃、才、二、と、字、平、論、出、不、未、人
と、云、ふ、の、こゝろ、幅、七、十、数、揚、け、と、あり、此、中、に

大分の人らしい句油の詩も見受けられ

秋夜元山秋江の似天瓢舟一葉年海月

入るべき

とんまの舟をえととあふ舟を解するこ

つこころ 福成式の詩をよむ御池山あり

積賦如上山教賦如下山熱界人多少

唯能上下山

えんまの舟歌うととあふ舟の詩とこと

ふこころ、又律詩も一擧出で飛つて終りの

二句を忘るなり

出立は是時山と友市成蒼雲一身あり

凡吟るは昔秋夜舟の月照清宵心獨

舟あり白川の親稱莫逆妻児を念

共固来

えんまの舟の詩ありあもは秋味をあらうと長

つこころ(中)のこころとこころの詩ありことか

出来

外又吉南の詩の詩山詩列とんを長うとつ釣る

と興くと吉南の詩の報解の詩をよむ物と件

送り報解の詩をよむとつ其の在末のこと

関了書簡の七又多けに人々世うに犬うを
をききんに其の多に此の年紙るを後
ひに元をもあも書天真極後まうむ子他の
こころみがるをりよく^{了又}南もまう成をんに
乳母の心得と起る者付のこまき又あつ
真面目に見るに而も其の又あつ極りう付を
くうしりえむ人に極あ見付の用意も極
まうち此のゆへ相叙の献立や極具の多き
うゆふ思ひをあらうそんをうんもめなるもあつ
あまあまのあつに^{了又}極りう極具の極

又自今とす系本縁物共を引ひとるこころき
ぬ形をとり御方を考もまういまのきつてあつ
義殿上の歴史を徹くこころの文もあつ
う出陣しとあつに中一^{了又}四年新録を
その三田と物も義殿を聞くに此の新書
や阿波に義殿の支歴を聞くに日六^{了又}之
の義を以て乳出する者而や漢流日記と
まああゆ途まをめりあ初め義殿の支歴
漢流をしに氏名も月も控へてあつ日記
や五十年前の義殿に教諭と元つに記す

近年の時間割に交えつて報時や況録やとて
ふらふと載しえんかぬものも今昔の感
おしの義塾の物多あはるる自合じて興
味を感す

他の一家に和洋考地圖をのれに陣列してある
と松を早稲田に傳しに之の流海を後人の
視摸のよむある洋本に古版の珍らしい者も
数書あるを他は北の陣列の内なる七珠と思
つたとアダムス、スミスの方圖論の原本を十数
版集めてまんじ一紙に陣列してあるもの

振つたうに、ふと外國の町を家々、字を集め
とつと澤のしきうと藤入しによむあると松
長を添うに

○圖書館協会より、も教上京しに校舎を利
用して前田侯爵侯爵の遺物を其の館をえん
と考へてもとらるるを館(五月林寺)同人二十
餘人と本館の館を出しけり、華族家の出陣ハ
りつ七部敷らふに過ぎりつ七揚をとも思ひ
らるるのも又おりひある係し且二五をともつて
遠近と見えつけに、今案目のしよめをたふ志

34

○一 宋葉春秋左氏音義 全宋文庫
四卷

○二 春秋胡氏傳纂疏 三十

至正年間刊本

○三 春秋左氏傳 寬永版
十五

木下順庵外筆 木下宣亮の跋あり

一 通志 万五千三

元皇次三年版

一 冥報記

長次二年序

○二 禮書 二四

明代抄本 葦其昌 清人何焯の印記あり

一 石田故中 玉山版

○一 程氏墨苑 萬一版
着色刻本

○二 素園石譜 刊本
萬曆版

一 訓世成字會 嘉靖年間刊
釋本

一 法性寺殿跡集

関白藤原忠通の跡集 嘉永二年の

抄本也

一 字鏡集 二十

慶永二十三年より二十四年に至る抄本

一 建治三年日記 是子本 金澤文庫蔵

三善康有の日記 原方自筆と云

一 新猿樂記 是子本

弘安三年の抄本 并慶永三年の抄本

一 馬射秘抄 十部十卷

足利代名人の筆 義政自筆の文

披うきアリ

二 ^数三代格

享禄三年本 享禄本三代格底本

一 小右記 是子本 三十二

年代今ぬせしに七八万年前ノモノ

書物メノ美(こと)

現在小右記中 最古のもの 流布本

と異テ凡所多シト云フ

皆松平公の手澤に依り文書紙の包紙を粘

着し自筆の巻紙をばう圖書研竟の一端を

見下ト述ふ 排列のものたるは稀觀の考るるも

〇を以し(さ)とのり其中の(是)品也

圖書の久し 百二比照圖の金工の印と錦布

の部を模して額面二枚と掲ぐ日英
 協会を陳しと見えたり後なるものと云ふ品
 書冊を製する寸法体裁の標本と云ふ松
 虫公の特ニ作らるる者(本製)離形四五行
 出陣あり曰く記録曰く系圖曰く真物曰く
 歌書云々其の大さ体裁と異る一其種を
 依り意匠も同し一と云ふ日英系標本
 其色も一板と漆を施し美觀に
 作り出さるる者也其の年譜と寸法を
 注ししと似音家の人の語るを要くする

本製冊の範として世に傳ふるものも保し此
 の範に則り其を奉るんが、この花本中在
 一たること云のやうに又本の虫窓ひ
 を補綴するものも一種の技術を練習
 せしめんが、其も古の時代版を補
 修すると同の方法を用ひて其人と差別し
 得たるものと虫窓の點を補ひしと見えたり
 と言ふが、この圖書の保存に力を致さん
 事始めに於て公的と後して深々國情し
 たる所なること、これらもこの圖書の保存に

くさるるをいふ

序表(序)を編み隠さくあまのいとまけの
清具をたぐくしと云ふ (五月林寺の記)

○田中義成の圖書録に今うたふる海濱の
古文書の時代特徴と記すの語を余も古所載
味をみまう余もと物お雨もろくはしれ其の
大意を掲げし後のの冬もみよるなり

時代を五劫に分ち

才一 奈良後醍醐時代 藤原時代

紙の考凡七階唐の醜似し字形

と日掲るぬか也 文体も唐風なり

藤原時代は造りて漸く日風化し

和具を著しけり

源平の代は造り著しく特徴をえ

る平氏の文書の字は雄大な流

氣象上に満ちこころなり

大まかな文書を古くい割るるに今

院もいふく保存てん居ぬとすあ

難め代のもあゆるは飾の也なる物に

重んじたることなり

才二級 領土の代

此の代に於ては文才の二級あり

一は公家柄 おのふゝゝ木敷

の物微きこととてふはさう

一は武家柄 まゝに到他の氣を

めを押す

此の代に於ては武家柄天下普く行

つゝ公家柄もさうさうの階級も

高かゝるゝゆゑに武家政況の

一般の善悪しるやと文才の境

微し得ん

才三級 建武中興迄 南北朝迄

建武中興迄の所増の中興の元

氣文才の及映る流儀もよゝ澄

の文才せん流儀もよゝ澄

この概

南北朝に於ては截然たる相異

あり即ち考へるに云く

北朝方々 公家のみ

南朝云々を唐抄りて極し之を

氣御上之湯

國家二報之合ん元正合則其の成るん
ハ各地言韻味言俗糾錯綜を極
め合ふ文者のおる統一するべきのえり
が通言信條條なる困難也此際
に於て行へんたる文者の形を極め
ハ也又くはハ式御のこころをわか
るゝものなるを二十四言位のこころ
敵を抄りてかき交るべきことのき

合大を底いそんとわが秘を要す
その體形ハ也隨てハ文者も
貴する徳し南朝文者目の本
了るもの言わたりしこころも
とさるる

中四抄 足利時代

足利義満より此の頃の特徵を
揮す此時代は於てハ從後其
るし為め此代の考へるべき行ハ即
ち其の極極なること其の極の

明の大祖の傳信出身と云ふ事も願
や師傳の書卷を用ひたるは傲
義満も傳を以て文書を用ひしめ
これ文書も其の特徴を有す是
利代に於ては編年史の如き改
元下り及び、余命書のことき随
て存じざるも書卷の御筆の命書
も現存書札の繕紙五七寸のもの
多数を占めたるは改元を流布
するに困難たる事を見れば

り南北組のゆかりと云ふ極めたる事
古きにも後にも要するは編年史
の如き是利ハ九代にもあるは
ぬし此の時代はたゞ古風極め
て又その改元も一考ししと曰
き凡そも後一考ししと曰く
思ひの書卷を用ひ又其の書卷
方言を定ししは山内年表
の文書も一考ししと曰く
九代にも一考ししと曰く

言雜りありし一紙を何れの地方の
文書なることをあきまを認りし。これを
るる天下令別紙の紙の文書も映出す
るなり也

足利三代の御用紙と云ふ鳥の子紙
を御用紙用の紙と云ふ(元もこれに
りありしものなり)を古御用紙と云ふ
例なきものなり(然れども御用紙の
用紙なるものなり)と云ふ各地の名家族
の御用紙と云ふものなり(御用紙の御用紙

同じ紙を焼く用ひしものなり(元も
直るる各地の名家族の御用紙の
文書も映りしものなり)と云ふ

才五郎 後醍醐天皇

徳田氏足利氏二代の御用紙と云ふ
と御用紙を焼くものなり(御用紙の御用紙
るる御用紙一紙張りの文書も映
してありと言ふ一紙も御用紙の御用紙
るる御用紙も御用紙の御用紙を御用紙
るる御用紙も御用紙の御用紙を御用紙

まじりこゝろアテに書きたる史料を依
り編纂せしむるのひまなきに候すべし
言ふ説もあらず。先づ角系圖を大体うか
へ出来ぬはうの真物ひまなき。録しむる前
巻のうらづ流を是れと記すべし。ひま
こと記すべし。ひまなき。又之書の偽物に
記すべし。楠山氏の文書にまじりし山世の
やまのうらづ其の十中の一を偽物ひまなき
併し其の偽物のまじりし其の八日を正し
しむるのひまなき。ひまなき。ひまなき。ひまなき。

もまじり行ひぬる。楠山氏より其の八を正し
しむるのひまなき。ひまなき。ひまなき。ひまなき。
七の書上親察すべし。一の要件ひまなき
うらづ。ひまなき。ひまなき。ひまなき。

(五月廿八日記)

○愚活欄 今回の進巻は、地方の鉄と雷
鉄と。うらづの市街新造の海り。ひまなき。ひまなき。
り、ひまなき。ひまなき。鉄と。前金のこ
と雷鉄と。ひまなき。ひまなき。ひまなき。
一受しむる。

書畫界の急行と。ひまなき。ひまなき。ひまなき。

園を遊び行かんて疾く何の事と聞かぬ大に或
又方画を好しとも交りて出来ぬとて園を
遊むと樹もも言はぬ元次は贈物を贈るを
んと急折方と見づるとも其る不とよと
ぬ

何人の中を職する画を書くと其れも
若者をとれんとて自ら自らおぼしき
又例の子息他三出ひ其り披き見して
さうと鳴破す其人怒つて其れを
を打擲し終る画を破き、其れを悔む自ら

人を殴打し其れを破るにんて教を
首を三つて他この一回の家族の家
さうと今更に入院いと其れも
幼井し揚々として其れを
行方と持身とさうして他この
船んをよ也他三妻妾の男し人格
高のこととさうして動もよ人
ふ余此の二語をよき悔扶と
海苔の甘一も人の傲慢と云ふ
く遊むの中庭也織女の家を

話の畫の依頼人等ありたりと云ふも他を託し
ん心容易に職命を命せし免す謝状もあ
す他を託すを要すも他三を父の信
つて名あとの依頼論する事
大概如電語了先琳と乾山先申と父の言を
千田を二分して先琳と其の五を信の
具を購ひ乾山を以の五を信の
扱ひしと云ふ

○家忠日記を記
りしと云ふ事三田福島の日記を家忠

あゆの邸宅(松本と原庄と島原藩を
家忠のあゆ(三田)也縁因りてあゆ
所別しりて又所別亦一宗伯
家忠の日本信使記録を編輯修め
之四十巻ありと云ふ事此の事
の要中を購ひし事

新村出著ある事一ブリッティング
日本刊行の稀覯書を一見しりて
其由は田菊之典の事也其大要を
前記に掲げし事也又所記の事

と云らんらうと日本國語の百種辭とて之を全
きしつて西歐文の著者の條に所引用者
極めて序くはり存れせざる書名も之を引せ
りつと譯す(其書九年の刊に係る)又後系集
と云ふ節用凡のその書七日録にありて是
本三年中函の節に致る所を刊行せし等の
ことりも亦極るありともしも之を流成せ
此流字のありしことと行々の譯者も亦流
成と云ふ西人之流字を以て機械をりして
高ししきも自在なる也又此種辭

輸入の字も以て日本に流成る地えと云ふ
ものも有り

京都の湯浅玄印といつても亦るや、流成ると
笑つても男也此の流成字、足白村に在
るものも有り、推夫成木田を極する
大丸^{家物}玄之の印物と云ふも亦る也、此
物と思ふに誰れか、五千由路、金を扱ふ
人、之を以て貴しむ、此を以て之を
也と譯すと湯浅と其物、此の後の譯
凡京都の字も亦るの物を極する也

と曉すそ方本を改訂を托すことすそ方本
主人元を願う物と看せ元を抄くことすそ
方本の改訂を願う物と看せ元を抄くことすそ
を免く事是れと云ひ其れににこそ
幅をぬる京師より二幅あり其の内書
三冊不存のりしもの先づ此の内書の
りしものりしもの先づ此の内書の
おとすことすそは二幅とも念りも
と京師をぬる事と云ひしこと
うけつる事と云ひしこと

又しと云ふことすそは二冊とも念りも
おとすことすそは二幅とも念りも
と京師をぬる事と云ひしこと
うけつる事と云ひしこと
ひ其の内書家の幅七と云ふこと
此の内書家の幅七と云ふこと
友を討つる人との幅七と云ふこと
此の内書家の幅七と云ふこと
得ずとも改訂の事と云ふこと
此の内書家の幅七と云ふこと
此の内書家の幅七と云ふこと
此の内書家の幅七と云ふこと

○丑月廿九日 梅の香を思ふに
マダダる内

抄書の内容を極し終焉のわがしむるも牧師の言
説を附加しなすことなるがと道進気つて回く
改竄しゆるとそのを文人筆と文その神
聖を汚するむ大なる沙も言わがが、が、
マンスも、何れが神一なる作ある改竄
しなると何んのま、う、改竄附れうか
る親交を其の附れ、家の始まらうとま
うしい、全体にんまことと目をむくむ
人孔の家入能りも同じことなる、此の刻の
換玉に漢せえはぬ、著るるイブセンコ
コ

に起りてイブセンコノラの念成に人との
す、主たるを政め、る、う、改め
の親類をえし主たる、むいす終る、
を断念する、こま、し、例、
ま、い、イブセン、が、
とを、貴ん、わ、
の改め、
ま、う、
ま、い、
ま、い、

と乾山崇禎の二人であらうとあるゆゑと云へり
 かく出づりける先づ其の改刻をとらえり。乾山の
 此と其の昔の物とを論まへて其の跡を
 の多くあるものせり。且つ鷹の言を深山
 のものもあつたり。その出資も四五千
 上位しう無うたが、中身を極めたる
 と遇ふべきものもあつた。外名中一碑と云
 り。大津え石工つを存のよか。此人のよき乾
 山遺書に載つる。此の取柄らうか。と云ふ
 此の人と おせうじ の おせうじ 乾山と云ふ

と人び、石碑も云ふと此人が抱一と謀つてせし
 せられた碑の其の字を石碑の碑文と抱一
 の偽名文と刻してある。又の文や、うい、ハ
んと云ふ。此人は遺物を考して其のつひ
 ひらひ、高目のこの内、碑の表裏を記し
 りの三四と云ふのは

萩原香介

夏延四寸の里、おくの考へる書は
麻のまろし、里、出、麻
 を白く出し、が、表、麻の鉄の
 所以、乾山遺書、表、麻である。

の二
津付巻

花四角 花山也、此版石やきこのよ
まの珠くしく見えよ

草花巻

以上皆大津也所花

枕巻三幅巻の一幅

えん右又花山巻(墨汁)の
え張大津不也

角花平一四

画花巻
花山巻(墨汁)のよ

花珠の画：花山の勢あるこのえん
と巻田春七花巻とくうとねん
の巻別るえんことあも

岩上ひらき

茶うけ小巻巻を竹巻(別方巻)
七巻巻えんかこえんこのよ

八橋田

田上平花巻幅の八橋を画こき
く巻の文こあもこえんこのよ
こえんこの味あるこのよ

繪魚圖

茶のついでに繪魚の油を引用也
魚の具を明心身し 滋味有る也
玉也

紅白秋圖

花危處を尋ねて酒井心元を
光琳画伊勢物語龍山画秋也
金地圖高合共名也
山岸光景所刻

火入

毒をも交へて其須の移移也
七味もいふに打洗下也

此ふも色を足すけりて平帳に
ありてしるしに記し置てある

石見終つて茶室のまへに行きとるは池の時
に新けし移りてる石碑 二ありて一とふん
養をうしむる也

放逸血^{ガシ}八十一^{ガシ}年一口吞却沙界大千
二二^{ガシ}和歌一首と刻す

雲海深有居士

龍山の自筆と刻し、その裏面に傳
を刻す

大正一基の碑を

表面

龍山深省蹟

と龍山自筆と定し、其子を集めて刻
し裏面に抱一の文と刻す、龍山の事蹟
を叙するに、八十二年四月二十八日
に歿し、其事蹟を叙するも亦ある
と刻し、中々大正永之の志を傳へ、建

この方を言うは、此碑文政癸未建つ所也
龍山の画名の光琳に比し、画家として光琳或
を傳へん、然るも其の藝蹟を伝へんとす、龍山
畫方先と傳ふる、こと或等、余と此の刻るを
又とす、所伝と此等しくす

の五月二日 龍山今の所、同日朱龍画二五
十一年記念堂を築、其の終焉の地とす、其地
分高寺、其内、其に開僧了、其記人と并
み、大正海原深き、其戸徳州、江州徳州、加州
前田等、母と其、其とか、其、花、其、其、其

美人と端々々々出陣てんあうとゆきこいんも
案内と受けけんは乾山とてんあうとゆきこいん
行き見子出陣戦野めうも数一々珠々関
読者群とるし一読読と得るしと殘念
うしうしが成るるを色物多く海列しあう
又とてんあうの年々るしとるる録す

一朱赤水神位 義公書 一基 徳川園助候所

一硯 一匣 舞丸造る 口上

端氏研 義公の銀も 方偏 朱硯
筆 其他の文具皆古雅 一匣 長方形
古色棟下(し)

一石 印 五款 糸方造る 口上

一小米の田舎書 山崎お探読細書移毛
信自致あり

漢書切り抜き 解説あり 口上

一朱赤の画巻 杜南秋興八首の 一 口上

一明監西魯王勅書 一匣 口上

解説漢書切り抜きあり

此一巻の文書を存する程比治後

楚節を勅書を全字に出す上程

明治戊辰の戦役と砲弾一巻 寶庫も

あうし 懐も此の上の口上を傷み

一 音注傳讀 糸乃自書 一本 同上

日本後練加の免書あり

一 奕 糸乃自書 一本 同上

鳥鷲を画くも後撰朱書をかか

一 論 同上 一書 同上

乙巳(寛文五)三月長崎に移し書言

せしこと後文にあり

一 書入本 同上

一 上義公書狀 各表干

一 朱鏡仁祭朱文恭文 一書 同上

疏仁と糸乃の好也延寶二年本邦に流

来せしに細書ありと祖父の教に記すを

得たり又享三年七月終身祖父に在

り克として再び流す時糸乃の

疏に世を謝り此之哀慟の言を括

す

一 楠公決子之圖 糸乃賛 採画 一帖

前田修之助

今年志は楠公遺墨の碑陰を此賛

を觀す始の解脫法を云ふあり

一漢五傑像

五幅 口上花

採出 採行 採雪画 采如 順毫

采如 順毫

采如の采如を採行の候に起すに采如
而して安東有采如を采如の采如に采如
采如の采如を採行の候に起すに采如
采如の采如を採行の候に起すに采如

一白文趾將相諸大臣即文 一幅 采如守采如

丁酉(我由曆三年)春執役文趾其文武大
臣或有同非所同者故揭榜以示之其

暇甲申採呈者采如之 於越朱三瑜

と采如の采如二年采如の采如の采如
と采如の采如二年采如の采如の采如
と采如の采如二年采如の采如の采如
と采如の采如二年采如の采如の采如

一朱采如の采如の内 同上

此の采如の采如の采如の采如の采如
此の采如の采如の采如の采如の采如
此の采如の采如の采如の采如の采如
此の采如の采如の采如の采如の采如
此の采如の采如の采如の采如の采如
此の采如の采如の采如の采如の采如
此の采如の采如の采如の采如の采如
此の采如の采如の采如の采如の采如

而高の如く入許をせしやを 衆の考
ふいふ余一生如也の語を 喜りふりか
きい又本上は 於て王完 勤る許を
日本に來るるふ及び有るを えて并ひ
ちうと

一 孔子傳 孫の如きもの傳 同上

漢書 國志 志あるもの是也

一 姓名振与末衆の考 一巻 同上

解説 漢書より出づ

一 心齋集注 三本 同上

有唐陸 翁の如きもの傳
リ一生の文道を 叙するもの也

一 七弦琴 二面 一紙 同弄 有唐遺書 同上

無欲の語を 若唐の年 録を 刻す

彭城の如きもの考を 記す所

一 巖葉考 一巻 同上

代中 文八年 中秋前一日 獨坐也 賦

謹路ある者 庵先生とある 巖葉

寫ハ有る庵先生の 名也

一 泰山記 并 七律 教首 獨坐也 同上

丁卯(夏高四寸)香子書枕書函宛
余と書とあり刊本茶芥茶園文集
未比此約をぬめす

出師表 稿三書 一書

壬子(寛文十二年)川又上瀬有庵

：時々のこと也

北地安東家花子所の名家書簡中
に廿尺五寸を尺のゆるゆると
の巻物也(多し)

此方の院の心紙出此又書よの(人)と初め

木下順庵安東家花子の書簡
書山家花子多し出陣ある人
と一列をす
ふよとまの(記)

三つ面子守

子守を無事踊とせしもの二種あり、三つ面と称する方は文政十二年
(一八一九年)時の女歌り名優瀬川菊之丞の演ぜしもの初めすと
いふ。曲は「本」と長唄とを奏せしもの、今は若殿を演ぜしもの
にて演ぜず。富本豊太夫化曲、瀬川也早代詞、西川扇能振
附(附)。
田舎生れの小女が江戸へ出てきた公し、子守となりたる時代凡俗の
実実なり。程な見を守る間に、或は流し歌を唄ひ、或は見
の眠るを待ちて手鞠を弄び、或は泣く子をなぐさすために玩
具の仮面を被りて、戯れに「おかめ」と「夷子」との痴言喧嘩、
「ハよとよ」(痴人)が「おふめ」に感慕しては現は寄り捨き口説
く様などをして演ぜるを大体の筋立てなり。下等社会の少女の風
俗と元今とを現はせしものとせり。

寒、山拾得

足利時代の画伯雪舟が画ける大幅の化物より画中の人物を抜出
だして唱詠し狂言に擬せり。
支那唐の代(紀元後七世紀頃)に、寒山子といふ隱者あり、何れ
の如より来州るを知る者なし、常に天台寺奥室といふ処の西
の方寒、山と称する一岩窟の中に住し、時、飄然として玉清
寺といふ寺に来りて、豊手禪師及び弟子捨得と號した。
或は長廊下に唱詠叫喚し、快活に独言独笑す。罵り逐は
んとする者あれば、之を駭りて、手を拊ちて呵々大笑せり、とや
く久しして去る。或はまた田舎に出で、牧羊者と共に且つ歌ひ
且つ笑ふ。蓬頭垢面、断衫破衣、形貌枯悴、且つ乞食の如く又
狂人の如し。されど之を語らざるを聴けば一言一語悉く生理に合はて
る。玄の妙を極む。
拾得も豊干禪師が金中に拾はるる春育せし者、故にかくは名
けたりといふ。拾得は後に寒、山に伴うる寒、山に優遊し、終に共
に之の伎く歌を知らずといふ。二人共に詩を善くせり。
本曲の画面は二人が寒、山に詩を題しつゝある様なり。曲中の詞
句の多くは二人が化中の名句を取入れ、知りたり。

朝妻

文受三年に名優坂東三津五郎が演ぜし七変化中の一なり。曲は長唄、代曲者杵登作、振附多賀間勘兵衛、市山七十六。元禄の画家英一蝶が画ける朝妻船の美人画及び同じ人の画に賛せる小唄にもとづきて化りたる者なり。鳥帽子水干を着たる一美人が鼓を手に置き、柳の陰の小舟に坐したる画なり。俗説によれば、此は五代將軍河川綱吉が、妻某の夜装姿を時に見し、一たる画なりしゆゑに、忌諱に能く一蝶は遠島、刑に処せられたり、云々といへど、それは跡方もなき訛傳なるのみ。

朝妻は近江の国の地名なり。昔は湖東の大港にして、船舶輻湊せる繁華の地なりき。その土らに昔は、渡る舟を汎行して、朝妻船といはしむ。船客のつれづれを慰むる妓女を載せたる舟もあり、一蝶が画きしはそれなるべし。小唄の詞を考ふれば、其意ほゞ此なり。

仇しつた良喜あせては互る良、お妻船の我、マヤ、嗚呼

またの日は誰に契をよはして色を、枕はぐらし、偽
 おちなる秋床の山、よーそれとて、もせの中。

本曲の詞句は殆ど美しき、唄語に歎す。妓女が其情夫を慕ふ意味を、三味線樂の曲節に都合ときやうに、連絡の微妙なる詞句に表現する言ひあらはし、舞踊の身振に変化あらし、人木とを主としたりの旧式舞踊とては、口取も代表的のものなり。

1. 年々その旨もあらずし 恰も昔の朝鮮のり
 2. 朝鮮のり 一般也 朝鮮七えんを 併明
 赴く 赴く 朝鮮と外四
 附属せん 文の 能つる 可成の
 四也 朝鮮人の 朝鮮の 遺り
 又男子の 朝鮮の 遺り
 也 朝鮮人は 朝鮮の 遺り
 七 朝鮮の 遺り
 後 朝鮮の 遺り
 書 朝鮮の 遺り

1. 年々その旨もあらずし 恰も昔の朝鮮のり
 2. 朝鮮のり 一般也 朝鮮七えんを 併明
 赴く 赴く 朝鮮と外四
 附属せん 文の 能つる 可成の
 四也 朝鮮人の 朝鮮の 遺り
 又男子の 朝鮮の 遺り
 也 朝鮮人は 朝鮮の 遺り
 七 朝鮮の 遺り
 後 朝鮮の 遺り
 書 朝鮮の 遺り

1. 年々その旨もあらずし 恰も昔の朝鮮のり
 2. 朝鮮のり 一般也 朝鮮七えんを 併明
 赴く 赴く 朝鮮と外四
 附属せん 文の 能つる 可成の
 四也 朝鮮人の 朝鮮の 遺り
 又男子の 朝鮮の 遺り
 也 朝鮮人は 朝鮮の 遺り
 七 朝鮮の 遺り
 後 朝鮮の 遺り
 書 朝鮮の 遺り

へんと欲し此紀朝令を以て終りに托し試み
 其目を作し之れをえんう左の如く也、六十行
 びるしある、そののえ掬を加ふんば一部文
 明源流書成者たるしと云ふべく思ふは
 一述者と答ふ其の都程の書物の言とる
 一の如くは少くは多き地の都程と
 對照し權衡をゆるるに宛たるも元本和
 文内を以てそのしるしを以てしるしある、
 かく分量の多きを以てしるしを得る

口徳記

- 一 蘭学書始 二冊 杉田玄伯著
- 一 洋学書始 一冊 河合之成著 安政版
- 一 赤松社遺厄小記 一冊

口宗教

- 一 克利支丹物語 一冊 寛永版
- 一 南宗寺物語 一冊 古鈔本

口文学

一 伊曾保托傳 三冊 萬流版

一 譚慈紀事 六冊 言本

△ 諺語

一 和蘭語譯 一冊 言本 昆陽

一 蘭字楷釋 二冊 大板盤水 天明版

一 蘭字通 一冊 蘇森信道 文化版

△ 地誌

一 華東通商考 二冊 西川忠英 元祿版

一 紅毛淡 一冊 後存翠春 明和版

一 紅毛雜記 三冊 森崎中良 天保版

一 盤方板記 二冊 大板盤水

一 坤輿全圖說 一冊 言和版

一 輿地志略 七冊 言本 崇林

一 坤輿圖說所由 七冊 言本 弘化版

一 西洋雜記 四冊 言本 森永版

△ 天文曆數

一 乾坤并說 一冊 南唐忠亮 言本

一 摩象新書 五冊 中倉抄圖 寫本
一 遠西視象圖說 三冊 吉原傳書 文政版

△ 理学 化学

一 氣海視潤 一冊 吉地林宗 文政版
一 舍齋辨宗 七冊 宇田川松庵 天保版
一 植學啟源 三冊 日
一 物類品階 六冊

△ 法制 經濟

一 和蘭政典 一冊 神田嘉平 明次元
一 和蘭律書 十四冊 宇田川松庵 寫本
一 經濟小考 二冊 神田嘉平 文政版

△ 醫學

一 南蛮忠庵外科書 一冊 寫本
一 解體新書 (解剖) 五冊 杉田玄伯 安永版
一 醫耗提綱 (口上) 三冊 宇田川松庵 文化版
一 醫原杞要 (生記) 二冊 吉原傳書 天保版
一 病子通論 (病記) 二冊 藤方洪庵 弘化版

- 一 診候大概 (診察) 一冊 吉本
- 一 内科道 (内科) 十五冊 宇田川格毫 寛永版
- 一 病源新志 (外科) 四冊 大槻紫舟
- 一 和蘭藥選 (藥考) 一冊 桂川南肉 吉本
- 一 和蘭藥鏡 (同上) 三冊 宇田川格毫
- 一 眼科新志 (眼科) 五冊 杉田錦陽 文化版
- 一 婦人病論 (婦科) 六冊 船曳卓也 素永版
- 一 幼：精義 (少兒科) 一冊 堀川素平 元禄版
- 一 牛痘小考 (痘毒) 一冊 榑林和山 素永版
- 一 養生法 (衛生) 一冊 松本順 元禄版

△ 兵事

- 一 海國兵談 三冊 林子平 天明版
 - 一 三兵器古祝儀 二冊 高橋善兵衛 安永版
 - 一 海軍砲術傳要 二冊 正木正三 未
 - 一 築城典型 五冊 大寺圭介 元禄版
- △ 破産工藝
- 一 機巧回案 一冊 細川玉孫 寛永版
 - 一 萬寶玉手箱 一冊 杉田成卿 安永版

一 遠西奇蹟 二冊 川本裕和 阿部好
一 華布使^{後篇} 一冊

〇 雜

一 長崎開見録 五冊 寛政版
一 横濱開港元史返四冊 文久版
一 蘭使日本紀行 十七冊 坪井信良 言本
一 奉使日本紀行 一冊 支地本宗 言本
一 異人恐怖傳 三冊 志華忠能
一 べりり日本紀行 一冊 言本

一 西國日記 一冊 下迄元禄初復
漢字活字混 言

一 環海異夢 十五冊 大概製本 言

一 深流異夢 十三冊 言

一 欧西紀行 二冊 其入を

一 米利堅紀行 三冊 活字書前巻一
活字書後巻一

以上

右刊の各本五冊に入らざるや恐く
とせん各本多少の増減と要す

(六月十日記)

と漸く成りて、その論旨も又分りて、
いとまきけん成前と、地念報親等と
格とゆき、山本利直等、
是れ一週一回、
既して授筆、
創業者の間、
八月末迄、
終定す。

附言 歴史と年とを
代のたむらよとせ、
味を生ずる、
其

五十年の昔も、
三十一年と、
と多しの別、
いことを、
校運と三十一年前、
照すん、

事の中未ゆきしもの月後三日を以て終りし
ハ時代

高野文忠のゆきしもの三十四と云
多額と七十五日其ゆきのもの、あつた
ことと云ふも入る程のゆきしもの
先年校定のゆきしものついでに
あつたゆきのゆきしものゆきしものゆきしもの
人と云ふゆきしものゆきしものゆきしもの
市のゆきしものゆきしものゆきしもの
又此のゆきしものを以て一年のゆきしもの

之千田ゆきしものゆきしものゆきしもの
をゆきしものゆきしものゆきしもの
創業史と云ふゆきしものゆきしもの
の

の上期のゆきしものハルマ和解放本を大槪
此ゆきしものゆきしものゆきしもの
をゆきしものゆきしものゆきしもの
しゆきしものゆきしものゆきしもの
人二十餘名を以てゆきしものゆきしもの
ゆきしものを以て、ゆきしものを以てゆきしもの

銀のつとめも解出部新紙をりく集
すうりし、書遷の折も尺くし息をきく

去年六月海上隨鳴先生御贈位ありしより

き通年、去年中、六月十日午後四時小石川区

傳通院本堂に於て追福會相嘗やい

波爾麻和解刊本寛政年活字板字本ドールハルマ其他

英文日語對訳に係る書類十餘種三十一陳列仕置

御展番之上仰一覽ト下ふに以上

海上先生の御孫有之や、御墓所在西京二條通
東寺町大恩寺、今日まで何等の御仕向しをい拙老の
祖父玄澤の高足として年来御墓参仕置就て、
今回御来拜に下し諸君より一円半圓の奉財を乞ひや
祠堂金として同寺に納め永世祭祀の料、併し音
此段豫め願上申し拙記念として和解活版開卷一頁
先生自筆七絶字共版共當日一枚つ呈上可仕い

明治四十五年六月

大槻如電

中々細川男爵の出入り係り

和魯通同此表

日歐對譯書類

海上先生追福會於
傳通院本堂陳列

波留麻和解

大本五册
ウスエフ

稻村三伯撰寛政八年一七九六江戸出版○横文は活字なれど譯語は總て筆寫に係る當時發行三十部にて語數は八萬餘なり序例共に不載
波留麻は人名なり フランス人トモ 其人の編纂せし蘭佛對譯書の佛語を去り蘭語に邦譯を加へたるもの原著者の名を直に辭書の代名としたるはウブスタアも同じ
和解ヤハラゲと讀むを正しとす阿蘭陀通詞が彼語を我が言葉にうつすを口和くわげと云ふ略してヤハラゲと唱ふ和解は即ちヤハラゲにて解の字は宣命書くわきの語尾添字の如し其グの字に解釋の意ある文字を用ひしなり次の和蘭譯語を見よ
又此書を江戸ハルマと稱するは次の道譯法兒馬の出來し後にて彼此言分つたためなれば
文政天保以後の稱なり

同

大本拾一册
寫本但一册缺

同書の寫本にて例言あり又大槻磐水が此書のなれるよしを卷首に叙せり寛政十一年と署し從游芝蘭塾膳寫全本諸子名姓を記す

- 藝州 香川 文禮 長州 田村 雲潭 米澤 内村 玄覺
- 熊野 永井 文郁 松山 進村 文碩 同 桑島 貞伯
- 笠間 長谷川宗仙

譯

鍵

大本一一册
凡例壹册

藤林泰輔撰 文化七年一八〇八京都出版○例言に一部を植刻し以て篤好に頼つとあり又文政七年京都藥舖中澤氏の追附せる例言にも活板とし百部を製し云々とあれど其板式を檢するに一字板とは思はれず但し横文と譯字とは謂ゆる割板わくばんにして分業彫刻なれば左右交互の所あり

例言に依れば波留麻和解の八萬言より三萬語を抄出し海上翁の許を得て上木すとあり翁とは稻村三伯にて此時は海上隨鷗と改稱して京都に寓居す凡例に海上陳人の跋あり

同

増補改正
大本一一册

越前大野藩士廣田憲寛が安政四年一八二七再版せしもの其例言に和蘭字彙貧生容易に購ふ能はず云々とあり

道譯法兒馬

大本八册
寫本

和蘭甲比丹ヘンデレックゾーフ氏は長崎に在留すると十七年故に日本語に通せり仍て通詞吉雄權之助西儀十郎等十一人を助手とし同じくハルマ氏蘭佛對譯書を原本として日蘭對譯書を作る自叙に五六年前より思ひ起してとあり和蘭曆數一千八百十六年文化とあれば稻村氏の波留麻和解より二十餘年の後なり。此書ゾーフハルマと呼び稻村の江戸ハルマと分てり。此ゾーフは長崎にて擧げし男兒を道富丈作と名のらしむ道富はゾーフの音譯字より來り訓讀せしなり本書題名の道譯は道富の略稱なり

荷蘭語林集解

大本四册
寫

天保中杉田立卿が道譯法兒馬に就き其要を抄し増譯を加へたるもの歿後十一年安政三年其子成卿又訂正して家に藏せるもの首に成卿漢文の序あり尾に從姪玄端が蘭文の跋ありゾーフハルマは徳川幕府に於て秘書として世間に傳ふるを許さず老中部屋長崎奉行所江戸天文臺各一部を備ふるのみ立卿は多年翻譯局員として抄出せしなり去共嘉永以後世の有志者の手筈に傳寫したり佐久間象山の如き上木を讀ひて許されざりき象山の書南葵文庫にあり

國書刊行會

和蘭字彙

大本 十三册

ゾーフハルマを官允を得て安政二年五月より滿三年に涉り上木せし者なり幕府の外科
醫官桂川甫周其弟甫策姊香月及び門人金田柳河等と校訂して刊行せしなりされど原書
ゾーフの自序も掛通詞の例言も悉く省き去り新に漢文の例言を掲げ巻尾には安政五年
五月桂川甫策國幹の跋を附して其編纂諸子の功勞を述べたり

和蘭譯語

大本 一册 寫

長崎阿蘭陀通詞の家に傳へたるものにて其開卷に阿蘭陀南蠻一切の口和とあり原語は
すべて片假名がきなり書中六部に分つ第一色第二道具第三人體第四病腫物第五イロハ
大集第六油なり第五の大集は原語イロハ順に集めたるにて阿蘭陀南蠻ラタイ三國口和
とあり(第六缺)

類聚紅毛語譯

小本 一册

桂川中良著寛政十年^{九一七}刊行○上の譯語を本據とし天地等部門を分ち蘭語片假名にて
記し上に譯語を置く首に兄月池國瑞の叙あり尾に葛西因是の跋あり

蠻語箋

小本 一册

前書の題名を換へ剩さへ桂川中良の名を削り東都熊秀英著とす且又月池の序をも除き
因是の文を卷首に移せり何故を知らず

同改正増補

小本 一册

箕作阮甫が横文を加へて嘉永元年^{一八}三月再版したる者なり然るに此年十月幕府より
書肆にて發賣する事を禁じたり

諸藥異言

大本 一册 寫

林子平が安永七年長崎奉行所に於て寫し來りたるもの卷首に同物ニシテ名ヲ異ニスル
物數多アリ刺的印和蘭蠻語三等アル故也觀者察之林子平所藏とあり原語を片假名がき
とし譯語を其下に置く舶來藥品取扱上亦通詞の家に傳へしもの

泰西藥名字引

小本 三册 本編二 附録一

加賀の横井全柳輯録 天保七年^{一八}出版 小森玄良の監修にて小石元瑞の序あり横井
は長家醫員とあれば前田侯の重臣長大隅守の家來なり

藥品名彙

小本 一册

尾張の伊藤謙撰其父圭介閔 明治六年出版。例言に醫術隆盛の期に至るも藥名を檢査
するに方て方今其書に乏し云々とあり

諸厄利亞語林大成

大本 拾五册 寫

阿蘭陀通詞本本莊左衛門正榮編録 文化十一年^{一八}題言及叙跋あり○長崎在留和蘭人
ヤンコックブロムホフといふもの英吉利語に通するに因り幕府より莊左衛門に命あり
日英對譯書を作らしめしものは也同僚檜林吉雄二氏と力を合せ四ヶ年を歴て譯語七千
餘言一部十五卷の書となせしと云ふ

英和對譯辭書

洋本 一册 石版

英國人メチイルスト撰 西曆一千八百三十年^{天保元年} 瓜哇島バタビヤ府に於て作る所なり
日本語は朝鮮にて倭語類解と題せる日韓對譯書あり其日語を基として英語を施したる
もの石版印刷なり

英佛和對譯辭書

洋本一册 活字數

西曆一千八百六十六年慶應二年佛蘭西人バーデ撰 巴里にて出版。漢字は字體甚拙し字の扁旁を別々に作り合せ用ゐるたるなり

英和對譯袖珍辭書

中横一册 活字版

文久二年一八六二江戸開成所編纂刊行○堀達之助箕作貞一郎手塚節藏等の編修にして譯體和蘭字彙等に據り英蘭對譯書より其英語を採り蘭語に換へしなり

同 薩摩版

中横一册 活字版

慶應二年薩藩の士高橋前田諸氏が支那上海の米華書院に囑して開成所本を再刊せしめしもの

華英通語

中本貳册

萬延元年福澤諭吉この書を米國桑港より得て歸り訓點を加へ増訂と冠して同年八月上木す漢文の序例あり

英語箋

小本壹册

長崎人石橋政方が疊語箋に倣ひて編次刊行せしもの文久辛酉正月なり

和英語林集成

洋本大壹册

米國人平文編譯 慶應三年一八六七横濱梓行

同 第二版

同大壹册

同 米國版

小本壹册

西曆一千八百七十三年米國に於て出版す袖珍本なり本書は米人をして日本語を習はし

むるためなれば兩語共に歐文なり

英華字典

大大本貳册

清の同治五年我が慶應二年一八六六支那にて出版せしもの○漢語は我が常用語なれば英書翻譯には盛に此對譯を用ゐしなり

同 縮刻本

小本壹册

上海申報館石印○彼の光緒五年にて我が明治十二年なり

英文熟語集

中本壹册

明治元年中津藩士小幡篤次郎同甚三郎纂譯三月刊行自序あり

英華字彙

小本壹册

英國人斯維爾士維廉士の支那英吉利對譯書其漢語に柳澤信大が訓點を施して明治二年十月刊行

英和字典

中本壹册

明治五年五月刊行吉田賢輔の序大槻磐翁の跋あり此書の出版は如電大に周旋せしなり余此時海軍兵學寮に皇漢學の教員として居たり徳川遺臣糟屋某來り兵學寮より刻費を仰ぎたしと云ふ因て近藤教授(眞琴)に其由を告げ納られて刻成したる書なり四十年の舊事を想出せり

魯語

小本壹册 寫

文化の初め長崎通詞馬場佐十郎が松前にて魯人兀老因に就き魯西亞語を學びし時に筆記せし對譯千餘語なり末に成語(問答賣買等)十二章を添ふ

意の古を尼を造りし佛の得とくしと
た終るる道とくしと人の山の中作に
字解し字とくしと字の稀觀の古字
者中一此一本無とされり

○京都大学圖書部長 新村出日洋の
中ブリックマン、ニエガアム石の
伊勢條物語、下家物語、石家集(此公
日本字)おと字とニ揚うせうくくこと
北の國者の略解と云ふこと
北はわたりし石三行の字と云ふは

さんとし、石家集の撰者石家文を
ト一のセシユエツトニツレオン、ワレエヤ
とくし(即ち石家集の撰者石家文を
其の由定此なるは初めと云ふこと
一頁八行、九行、十四字、乃至十六行、つめ
え字の石家、音訓と平假名入附し、体
裁約石の如し

石家集

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

此書流字所とす（此流字の長崎の印氣
印氣本ありけりてその字を核紙にて
字體の如くも見る也此書は慶長三年
印氣本會の出版物なり）（二月十二日記）

以下全て
白紙

